

炭焼き長者の話 搬運神

伊藤清司※

1

この話は改めていうまでもなく、富貴な育ちの女が人里離れた奥山でひとり炭焼く賤のものへと遠路はるばる訪ねて来て押掛け女房になった、おかげで炭焼きは稀代の分限者になったという出世物語である。ただしこの二人ははじめはともにどちらかといえば幸福には縁遠い、しかも全くの赤の他人であった。我が国では赤の他人同士の結婚を、生まれつき赤い糸で結ばれていたと表現するが、中国の一部の民間故事ではこうした結婚を天婚と称している。

ところでわが国の炭焼き長者譚が語る「天婚」の経緯はさまざまである。嫁ぎ先を追われた女が今更実家にも戻れず当てもなく山路を辿っていると、闇の中に漏れる灯火が見えたので、その荒屋に一夜の宿を請うたのが縁で、そこの家の嫁になったというような話（秋田県北秋田郡阿仁町、阿仁町教育委員会『阿仁町伝承夜話第三集』一九七四、18頁）もあるが、比較的次数の多いのは、女性が日頃信心している神佛のお告げに従って、あるいはその垂流かと思うが、易者・占い師の類の教唆に促されて、長旅の末に、世情に疎い山家暮らしの見知らぬ男と夫婦になったという話である。

この際注目したいのは、赤の他人の両者を結びつける赤い糸ならぬの登場する話である。ときには冷酷無惨な父親に勘当された娘（初婚型）が、または非情勝手な亭主によって離縁された女（再婚型）が一旦は絶望のどん底に突き落とされたかに見えながら、忽ち億万長者となるべき朴訥な男へとひそかに導く無名の第三者が登場することである。ただしその黒衣役を演じるのは人間ではない。それは、物言わぬはずの鳥や獣であった。柳田國男は早くにこの存在に注目し、その名作「海南小記」の中に沖縄本島宜野湾市のつぎの昔話（「炭焼き長者再婚型」）をとりあげている。

折目の祭りの日に（中略）新米で飯を炊いたのが悪いと謂って、夫に追出された女房が（中略）【嫁ぎ先を】去りかねて居ると斯う謂ってクラー（雀）が彼女を導いた。

クル、クル

クマネスダカラン（爰には住まわれぬ）

ヤンバルヤマイ（山原山へ）

タンヤチグラカイ（炭焼のクラへ）

さうして【出戻りの女は】炭焼きの妻に為って、忽ち金持になった。（『柳田國男全集』第三

※慶應義塾大学名誉教授

これとよく似た話は隣接の中頭郡読谷村喜名にもあった。

(梗概) 大晦日に妻が粟飯を炊いたのはけしからんと怒って亭主が離婚した。女房は里にも帰れず当てどもなく歩いていると、雀が呼びかけるように先を進んでいく。女はあとをついて行くと薄汚れた炭焼き男が住む洞穴に辿りついた。まわりを見回すと悉く金であった。(読谷村教育委員会・歴史民俗資料館『喜名の民話 読谷村民話資料集2』一九八〇, 自刊)

雀が女を一気に至福へと導く同趣向のモチーフは同じ村の長浜にも、近くの具志川安慶名にも伝えられており、さらに那覇市山下にも同類の昔話がある。ただしそこでは誘導役の鳥の名までは語らず、単に鳥といっている(那覇民話の会『那覇民話資料第一集 小禄地区』, 一九七九, 那覇教育委員会, 31頁)が、想像するところ、それも雀のことであろう。異色なのは国頭郡本部町伊豆味の昔話である。黒衣役を演じるのは小鳥ではなく蛙である。この小動物が婚家を出された失意の女を「炭焼き息子にコッコイ, コッコイ」と鳴きながら炭を焼いている男のもとへと誘導している。(沖縄民話の会『沖縄の民話集第一集』自刊)

なぜここで蛙が登場するのか詳しいことはわからない。黒衣役は何も飛翔する禽鳥類とは限らないからなのかも知れない。だが、想像するところ、地面をピョンピョン躍ねながら歩む小雀のイメージから派生したに過ぎず、この蛙は雀誘導モチーフのバリエーションなのかもしれない。いずれにしろ、縁もゆかりもないかに見える男女を雀が天婚へと導く話が沖縄半島の一部の地域に顕在している。炭焼き夫婦の出世劇の冒頭で、女を男のもとへ連れていった雀に柳田が関心を寄せたのは、もちろんただの小鳥とはみていないからである。この物語にはいくつかの神妙霊異な動物が登場する。雀はその最初の登場者である。

因みに柳田は上掲の宜野湾の伝承をとりあげたあとに、女が雀の鳴く声を聞いてそのあとを追ったことについて「古い古い公治長系統の一節」という言辞を述べている。公治長とはいってもなく儒祖孔子の門弟にしてその女婿でもある人物で「能ク鳥語ヲ解」したと伝えられる春秋時代の奇人である。柳田がここでわざわざ『孔子家語』の一文を引いたのは、神妙な雀もさることながら、この小鳥の言葉を理解して黙ってついて行った女性も公治長に劣らず非凡霊異な人物と考えたからかも知れない。ただし忌憚なくいえば、柳田がこの沖縄島の昔話にいきなり中国古典の一節を引いたのは些か唐突でかつ説明不足の憾み無しとしない。しかしこのことを今とりあげると話が錯綜しかねないし、追々に柳田のこの短い発言の妥非に触れることになろうかと考えるので、ここでは問題にしない。

一旦は悲嘆に泣いた女を愚直な炭焼きに結びつけ、おかげで二人は急転直下評判の長者になったというこの物語の黒衣が使役獣であったという昔話がある。それは雀のその話よりも遙かに多い。内田邦彦著『南總乃俚俗』の「荒神さま」の話の中で、その黒衣役を演じるのは牛で

ある。

【親がきめた自分の妻の】顔好からぬに【亭主が】愛想をつかし、赤飯をたき赤牛に女を乗せ強ひて野に放ちたり。女泣き悲しめども詮なし。唯牛の歩むに任せ歎きつつ山中の一軒屋につき、【その家の】人の止むるが儘に止まりて婦となり数多くの奴婢に侍かれて安らかに日を送る。(一九一五、桜雪書屋、101～102頁)

これと同じ趣向の「夫婦の運」と題した昔話が青森県西津軽郡木造町大畑にも語り伝えられている。

(梗概) 本家の旦那が産神の問答を耳にし、分家の娘を倅の嫁にすると家がにわかに繁昌した。だが倅は嫁が気に入らず赤牛に乗せて追い出した。牛は山中の賤の屋の前で動かなくなった。その家の主が女を憐れんで泊め兩人はめおとになった。するとそのあばら家に運がめぐり、夫婦は大勢の召使いを抱える長者になった。(木造町教育委員会『木造町のむかしコ集第2集』、一九八二)

隣県の秋田県由利郡由利町山本にも類話が伝えられている。煩瑣になるのでこれも要旨のみをあげる。

女房を娶ると家は裕福になった。亭主は怠け、酒ばかり吞んでいたが、女房の方はよく働くので評判だった。それを亭主が気に喰わず、ついに「牛一匹をやるから何処へなりとトットと出ていけ」と引導をわたした。女房は泣き泣き牛にまかせて山路を行くと、荒れはてた小屋の前で牛は動かなくなった。女はそこに住む男の押掛け女房になり相交わらずよく働き、夫婦は大金持ちになった。(「厄病除けのぼた餅」今村泰子『羽後の昔話』一九七七、日本放送出版協会、138～140頁)

新潟県五泉市町屋にも類話が伝えられている。「青竹一本とアワー石」と題された昔話である。

(梗概) 親が産神の会話をもれ聞き、それによって決めた結婚だが、肝心の息子は嫁が貧乏な家の出であるのを嫌い、牛一頭を与えて離縁した。女は今さら里に戻ることもできず、

「ウシ、ウシ、おれのえんねん(因縁)のあるところへ行ったら、ベタンと【地面に】すわってくれ」

と頼んだ。そして乗った牛が坐り込んだところの粗末な小屋に住む老嫗が快く女を迎い入れたので上り込み、やがて山仕事から戻って来た息子に請われて嫁になった。すると家はよいことばかり続いて栄え、やがて人々から庄屋さまと呼ばれるようになった。(口述者、黒井モ

ト。水沢謙吉「運定めと産神問答」『日本民俗学会報53』54～56頁)

このように天婚の陰の仲人役をするのが牛だという話は東北地方や新潟県に多い。管見に入
った目ぼしい類話は内容が大同小異なので省略し、その所在のみを収載文献名を添えて列挙す
る。

- 青森県八戸市 (正部家種康『南部昔こ集 - 八戸地方の民話』一九七〇, デーリー
東北社)
- 同 県三戸郡五戸町 (能田多代子『手っきり姉さま 五戸の昔話』一九五八 未来社)
- 宮城県多賀城市東田中 (酒泉型)
(佐々木徳夫『みちのくの海山の昔話』一九七〇, 講談社)
- 新潟県栃尾市比礼 (水沢謙一『栃尾郷昔ばなし集』一九六三, 栃尾市教育委員会)
- 同 県南蒲原郡下田村 (変形)
(岩倉市郎『南蒲原郡昔話集』一九一三, 三省堂)
- 同 県長岡市前島町 (水沢謙一『むかしあったてんがな - 宮内昔話集』一九五六, 長岡
史蹟保存会))
- 同 県見附市 (変形)
(文野白駒『加無波良夜譚』一九三二, 三元社)

右のように天婚の陰の仲人は牛が圧倒的に多い。しかし中にはそれが馬である例がない訳で
はない。新潟県長岡市西蔵王町に伝わる「青竹三本と米一石」がそれである。

【嫁ぎ先を追い出された女が与えられた馬に乗り】

「馬、馬、おら、今さらうち(実家)へかえらんねすけ(戻れない), おめい, おれをのせて
えんねんのあるところへいったら, とまってくれ」

というと, 馬はある村のばさ(老嫗)が倅と暮らす貧乏小屋の前で停まり, 女はその嫁に
なった。そのうちに夫婦はがよくなった。(水沢謙一『おばばの昔話』一九六六, 野島出版社,
461～469頁)

ただしこの長岡市西蔵王の話は上掲の五泉市町屋の「青竹一本とアワー石」と瓜二つの内容
である。したがって長岡西蔵王の馬は同じく役獣の牛から入れ替わったとみることができるか
もしれない。

東北地方や新潟には南海の沖縄のように陰の仲人が雀などとする話は寡聞にして私は知らな
いが, 以上の資料からすると, 沖縄では雀が神聖視されていたのに対し, 北日本では牛を聖な
る動物視していたのではないかということも考えられないこともない。しかし, 限られた資料

から性急な推理はここでは暫く措くことにする。

2

中国の炭焼き長者型民間故事では、町場育ちの聡明な女を世事に疎い山家暮らしの男へ運んでいくのはたいてい牛か馬と決まっている。雲南省怒江自治州の怒族が伝える故事「三番目の娘」

（梗概）富豪の父親が三人の娘たちに「よい暮らしのできるのは誰のおかげか」と問うた。上の娘2人は「父母のおかげ」と応えたが、末娘は「私の汗のおかげ」と答えた。また、上の娘が嫁ぎ先として金持ちの家、中の娘が山主（山持ちの土豪）の家を選んだのに対し、末娘は勤勉で善良な貧乏人に嫁ぎたいと答えた。激昂した父親は末娘を絶縁し、片目の痩せ馬に乗せて追い出した。馬は山麓の樵夫の家の前まで来て停まった。末娘はその樵夫と夫婦になり、その後、末娘を乗せて来た馬のおかげで金銀を発見して大金持ちになった。一方、娘と縁を断った両親は恥じて死んだ。（「三姑娘」口述者、胡利伯。『山茶』一九八〇年第三期、75～76頁）

同省同州福貢県臘吐底村のリス族の伝える「夫を探す王女」。

（梗概）昔、国王が王女にどんな婿候補をもって来ても首を縦に振らないので業を煮やし、僅かの金子^{きんす}を与え、老いぼれた黄牛^{あか}に乗せて国外に追放した。牛は山で柴を刈って病母と二人暮らしの男の草葺き小屋の前で停まり、王女はその家の嫁になった。翌朝、王女は金子を渡して市場に買物にやると、男は沢山の食糧や衣料を背負って戻って来て、あの金子と同じものなら柴刈る谷にいくらでもあるという。こうして柴刈り夫婦は巨万の富を手に入れ、王宮に勝るりっぱな御殿を造った。国王はそれを望見し、羨望と羞恥のため川に飛び込んで死に、柴刈り夫婦は国王と王后におさまった。（「公主尋夫」口述者、哭瑪木。『山茶』一九八八年第三期、11～13頁）

同省文山苗族自治州西畴の壮族の村に伝わる「竈祀りの由来」並びに同趣向の同省紅河哈尼族彝族自治州建水県鉄所村の彝族に伝わる「禍を福に転じた盲目の娘」の2話を続けて列記する。

（梗概）父と年頃の娘たちの福分問答で、盲目の娘だけが父の意に添わない返事をして逆鱗に触れた。父に殺害されそうになった末娘を母親がひそかに馬に乗せて逃がした。娘は馬がたまたま停まったところの洞穴で暮らす木樵と夫婦になり、女が差し出した銀塊が発端となって2人は長者になった。（「祭灶的来历」口述者、灶族の田蘭芳。文山州民族事務委員会文

化局，文学芸術界聯合会共編『文山苗族自治州民間故事集第一集』一九八二，109～110頁）

（梗概）父と息子および娘の福分問答。父親は息子4人の応答に満足し，盲目の娘の返答に立腹。母親は娘の身の危険を案じ，馬に乗せて逃がした。馬が山麓の水辺で停まり，娘はおりて水を飲むと眼が見えるようになった。山の洞窟に泊まろうとすると，そこが樵夫の住いで，その妻になった。2人は山の金塊を手に入れて金満家になる。（口述者，李喬英。採録者，易榮輝。「盲姑娘因禍得福」『山茶』一九八八年第五期。60～61頁）

以上はすべていわゆる初婚型だが，この種の話は日本同様再婚型にもみられる。とりあえず1例をあげる。

（梗概）夫に殺害されそうになった嫁を，岳父母が気の毒がり「欲しいだけお金をあげよう。馬小屋の中のどれでも好きな馬に乗って大急ぎで逃げなさい」と諭した。嫁は金銀を風呂敷に包み馬を曳き出して騎り婚家をあとにした。太陽が西の山にかくれる頃，馬は進もうとしない。小さな茅葺き家の戸口で棉を紡いでいる老嫗に声をかけ今夜の宿を頼むと，やがて息子が地主の手伝いから帰って来た。2人はささやかな祝言をあげ夫婦になった。そのあと女の持参金で耕地を買入れ，その畑の中から銀子のはいった甕を掘り当て，かつての小作一家は近隣に並ぶものの無い長者になった。（「灶神菩薩」伝流地，四川省成都。採録者，黄伝芬・辛風。劉錫誠『灶王爺的伝説』一九九五，花山文芸出版社，72～77頁）

女が騎った牛馬が歩み続け，日が暮れて，たまたま立ち停まったところに住んでいた男と偶然にめおとになったというのはもちろん真相ではないだろう。この型の民間故事の多くは，我国同様，その牛馬は人語を理解し，乗った女などの意を体する靈異な存在として語られている。雲南省大理州洱源の白族の「轆角庄」

（梗概）白王の小公主（年下の公女）は日頃牛を愛していた。父王が彼女の婿探しを始めた。小公女は牛に「私を乗せてどこかよい嫁入り先に連れてって」と話しかけると，牛は頷いた。彼女は父王に結婚は天婚（天が予め定めている結婚）であるべきだと説得し，父王も仕方なく承諾した。小公主を乗せた牛は轆角庄という集落の，病状に臥す母と暮らす柴刈りの萱葺き家に着き，山から帰ってきた柴刈りの女房になった。小公主は自分の黄金の腕輪を柴刈りに与え，銀貨と交換して病母の薬を買い求めさせた。はじめて黄金の値打ちを知った柴刈りの漏らした一言が縁で2人は大金持ちになり，白王は柴刈りを正式に小公主の婿「駙馬」に任じた。（徐嘉瑞採録。中国作家協会昆明分会民間文学工作部編『雲南民族文学資料第十集』白族民間故事集（二）一九六三，24～28頁）

同趣向の故事は同省羅平県八大河の族の間でも語られている。

（梗概）末娘の返答が気に喰わないといって父親が息まいた。母親は娘の身に危害の及ぶのを恐れ、厩舎に行き馬たちに向かい、「娘をぜひ安心できる場所へ連れてっておくれ」と呼びかけた。しかし、どの馬も横を向く中で驢馬だけが頷いたので、娘をそれに乗せて逃がした。途中で驢馬に出遇った易者が娘に「この驢馬が停まったところで嫁になれ」と教えた。娘はそのとおり驢馬が停まった掘っ立て小屋に泊り込み、柴刈りの押掛け女房になった（後略）。（『灶君的伝説』口述者、熊阿門・李樹杰。採録者、成其昌・張亜森。『雲南省民間文学集成 羅平県布依族卷』一九八九。ただし劉『灶王爺的伝説』一九九五、花山文艺出版社、105～110頁による）

因みに易者云々の話は驢馬が末娘と掘っ立て小屋住いの柴刈りとを結びつける黒衣役を演じるモチーフに屋上屋を重ねた複合部分であろう。

以上はいわゆる初婚型の例だが、人語を聞き分ける牛馬の登場する再婚型も少なくない。四川省珙県の苗族郷に伝わる「乞食女」故事もその1つ。

（梗概）易者の占いで地主が乞食の娘を総領の嫁にしたが、当の総領は彼女を嫌い「馬1頭をくれてやるから出て行け」と離縁した。女は馬小屋に行き赤い大柄な驢馬を選び、「私の住むべき所にいったら3度首を下げておくれ、洞穴だろうが何だろうが構わない」と話しかけて出立した。驢馬は森の中の柴刈りの暮らす萱葺き小屋に来ると3度頭を下げた。女は柴刈りとささやかな祝言をあげるため、銀子を彼に渡し、米と肉・線香・蠟燭・紙銭を買うように頼むと、「こんな物でそんな品々が手に入るならおれが柴刈るあたりの岩穴に沢山ある」と呟き、2人は銀の山を手に入れた。（『叫化女』口述者韓登華。採録者、范仲成・熊湘模、『中国民間文学三套集成・四川宜賓地区卷（二）』一九八九。ただし劉守華・黄永林選編『中国民間故事精選』一九九三。華中理工大学出版社、274～276頁による）

この類の再婚型は随分多い。どれも異工同曲であるのでなるべく退屈にわたるのを避け少し異色な故事を1つだけ選んであげる。四川省甘孜州理塘県の藏族の民間故事「運氣」の骨子。

国王が王子の嫁に卑しい雇用人の娘を選んだ。ところが国王が亡くなると、大臣が彼女は王后にふさわしくないといい、王宮から追放した。女は与えられた黄牛に向かい「南無阿弥陀佛、黄牛よ、私はお前の行くところについて行く」といってその尾をとって歩き出した。陽が暮れ深い森の中で牛は動かなくなった。人っこ一人いない森の中で彼女は泣きながら睡ってしまったが、夜が明けて気がつくと、壺焼きの土工とその母が心配気に覗き込んでいた。彼女は壺焼きと夫婦になり、黄金を発見してその地方の王と后に推戴された。（口述者、巴登。

採録者、成衛東。甘孜藏族自治州文学芸術界聯合会『藏族民間故事下集』一九九〇、239～240頁)

牛や馬が町場の女性を山住みの男へ配偶させる話の中で、その物言わぬ黒衣の靈異さを象徴的に示しているのは背面騎乗モチーフである。明代の倪輅輯『南詔野史』の炭焼き長者型説話にはすでにこのモチーフが認められる。

南詔蒙閣邏鳳^{むすめ}、女有り。擇配(配偶者選び)ヲ成サント欲ス。女曰ク「擇配ハ天婚ニ非ザルナリ。我ハ牛ノ背ニ倒^{さかし}マニ坐リ、牛ノ之ク所ニ任^{まか}サント欲ス。貧富貴賤ハ問ワズ。牛ノ入リシ家ハ則チ之レニ嫁ガン」ト、鳳ハ勉メテ其ノ請イニ従ウ。(原文は漢文)

ほぼ同文は清・師範の『滇繫』巻十二にも載っているが、白族が伝える現行の民間故事にもこのモチーフが多く認められる。その1つ「十番目の娘」

(梗概) 9男1女の財産家の父親。末娘だけが「父の福祿」を認めず家を追われる。娘は母親がそっと渡した銀貨3枚を持ち、使用人が厩舎から曳き出した白い馬に後ろ向きに乗り「馬の行き着いた所が嫁ぎ先」と祝祷してわが家をあとにした。馬は老嫗が藁鞋を編んでいる洞穴の前で停まったので下り、日が暮れて戻って来た柴刈りの息子の押掛け女房になった。翌朝、銀貨を握られ買物を頼まれた柴刈りが、途中で野雉を見つけ、掌の銀貨を石塊のつもりで投げつけ、その失敗が一転して銀鉞を発見し、2人は財産家の父親が羨ましくて仰天死するような大財産家になった。([十娘]採録者、阿澤。『山茶』一九九一年第一期、26～28頁及び16頁)

白族の背面騎乗モチーフの例として長編叙事詩「轆角庄」(趙櫓整理)を加える。

(梗概) 南詔国王に後継の王子が無く、公主に婿を迎えようとするが、彼女は拒み、水牛に「私を幸せになるところに連れて行って」と語りかけ、その背に後ろ向きに騎った。母后は「ご縁は天が決めるものよ。本当の連れ合いは天がひき合わせてくださるわ」と公主に賛成した。水牛は蒼山の麓を行き木樵の家に着いた(以下略。『大理文化』一九八一年第四期、70～74頁)

背面騎乗モチーフは雲南白族の民間故事に顕著だが、白族以外の少数民族の間にも、雲南省以外の地でも語られている。あとでもこのモチーフを含む故事をとりあげる筈だが、とりあえず広西壮族自治区金秀壮族の民間故事をあげる。

（梗概）富豪の3姉妹。姉たちは親の決めた然るべき家に嫁いだが、末娘は拒んだ。両親は立腹し娘を驢馬に後ろ向きに乘せ「驢馬に一切指図してはならぬ。停まったところの家の嫁になれ」と命じた。驢馬は瓦を焼く作業場の前で動かなくなり、そこに暮らす男に娘が買物を頼もうと金子を手渡すと、男それを眺め回わして、「草刈る山にいっぱいある」と彼女に告げた。（韋松英、採録「咿鳥」『金秀瑶族自治县民間故事集成』一九八四、348～356頁）

この項を執筆するに当たって多くの教唆を得たのは百田弥栄子氏の論文「龍脈をたどる馬—西南中国の山曼荼羅」（説話・伝承学会編『説話—異界としての山』一九七七、翰林書房）の第四節である。牧歌的なタイトルの「馬に揺られてお嫁入り」（『同上書』221～237頁）の中に西南中国の炭焼き長者型の資料19話（すべていわゆる初婚型）を掲げられている。そのうち背面騎乗モチーフを持つもの7話、騎った使役獣は馬（驢馬を含む）が3話、牛（水牛を含む）が4話である。

これら一連の背面騎乗モチーフに関連して興味深いのは騎乗招親（走馬定婚などともいう）モチーフである。広西壮族自治区北部、環江県の毛難族（侗傣語群）の間に伝わる民間故事「馬に乗って婿探し（騎馬招親）」。

昔、毛難族に譚七宗という有力者がいた。彼に愛春という年頃の娘がいた。大勢の仲人が譚家にやって来て愛春の縁談を申し込んだ。母親は娘の結婚は娘にまかせているからといってとり合わず、当の愛春はただ黙って笑っているだけだった。

譚家に同じ譚姓の傍種という貧しい若者が雇われて働いていた。彼は打狗河の畔の萱葺き小屋に住み母親を養っていた。愛春はその若者にひそかに好意を抱き、年の暮には両親に内緒で食べ物や自分が織った布などを送り届けさせていた。

ある年の正月、母親が愛春に「燕の児は大きくなると自分の巣をつくるのよ。女も年頃になれば嫁入り先を探さなきゃ」と言い寄せた。愛春は「だけど仲々いい人がいないの」と応えると、母親が微笑しながら屋敷内にいる白い馬を指さして言った（以上梗概）「お前、馬に乗って婿殿を決める騎馬招親ってことを知っているでしょう。馬に後ろ向きに騎って勝手に行かせ、停まったところの家に嫁入りするっていう訳よ」（以下再び梗概）傍種は愛春の母親が娘を馬に騎せて嫁ぎ先を決めさせることを知って内心喜んだ。彼は愛春の騎る白馬を日頃から飼いならして毎日牧草地への往復に自分の家の前で馬を停め、ひと休みするのが習慣にしていた。愛春がきつと自分のところの嫁にくるに違いないと思っていた。

さて当日、傍種は親方の家の厩舎から白馬を曳き出した。愛春は馬の首を背にして【後ろ向きに】騎った。馬はヒヒンと嘶き【ひとり】歩き出した。愛春は「ヤッコラサ節（羅 嘸歌）」を【即興で】口ずさんだ。

〽燕はどの家の梁に落ちつくかしら、

馬はどこの家の前に停まるかしら、

ヤッコラサ

賢くて何でも見通しの白馬よ

私を乗せて愛する人を捜してね

ヤッコラサ

白馬はやがて打狗河畔の萱葺き小屋の前まで来ると歩みをとめた。愛春は母親のいった騎馬招親はこのことだと思い、馬をおり小屋の中で衣服の繕いをしている媼を訪ねた。そこはまぎれもなく傍種の住まいだった。愛春は「今日から私はお宅の嫁なのよ」と言って、花模様の布を結んで婚約のしるしとして【媼に】手渡した。こうして愛春は傍種と夫婦になった。（口述者、譚善明。採録者、韋志彪・過偉。『民間文学』一九九四年第十期、30～32頁）

上掲の百田論文に教えられた資料であるが、雲南省大姚県石羊鎮の彝族に「と」と呼ぶ長編の民間故事が伝えられている。

（梗概）昔、楊梅山の麓に彝語で楊梅花を意味する色絡米という評判の美しい娘がいた。求婚者がひきもきらずやって来たが、両親は娘の騎った馬まかせて伴侶を捜す「走馬定婚」によって婿を決めることにした。それと知った町の若者たちは家の口に青草を積んで色絡米の乗った馬が立ち止まって草を食べるのを待った。しかし馬はどの家の積み草にも見向きもせず、真っすぐに楊梅樹の繁る楊梅山へ駆け、谷間にある掘っ立て小屋の前の青々とした草を食べ始めた。小屋には黒木越という若い獵師が住んでいた。色絡米は偶々その小屋の前の草叢の中に金色に光る物がいくつもあるのに気がついた。彼女は黒木越を誘ってその光る物が沢山あるという谷川のほとりに行ってみると砂洲一面が金であった。（以下略）（口述者、汪金沢・李灿周。採録者、黄自権。『山茶』一九八九年第五期、59～65頁）

同省楚雄自治州の彝族に伝わる「さかしい器量よしの娘（聡明美麗的姑娘）」は騎馬招親・走馬定婚のモチーフの実態をいっそうはっきり物語る興味深い故事である。

（梗概）ある物持ちの家に聡明で美しい娘がいた。両親は娘に生涯の伴侶を馬に騎って捜させることにした。娘に銀子を渡し馬に騎せて出立させた。馬はドンドン駆け遠い土地に進んだところの蕎麦畑の傍で降り、辺りの草を食べ始めた。近くに1人の若者が住んでいた。麻の着物に獣の皮を重ね着した貧しい身なりをしていたが、朴訥で実直な男であった。女は「ここが私の【嫁ぎ先の】家よ。どうかあなたの奥さんにしてください」と声をかけ、その男の押掛け女房になった。

このあと男は毎日山仕事に出かけるが、美しい女房が気になりすぐ戻ってくる。その訳を悟った女が自分の似顔を描いた紙を夫に持たせて仕事に送り出す云々という絵姿女房譚へと展開

する。この際興味深いといったのは、故事のこの後半ではない。前掲した毛難族の故事と相俟って「騎馬招親」という婚俗の存在が浮かびあがってくるからである。それもさることながら、じつはこの故事の冒頭で口述者の楊秉有氏がつぎの解説つきで故事を語り出している。

昔、われわれ彝族の間にはつぎのようなきまりがありました。娘が大きくなり結婚適齢期になりますと、馬に乗せて生家を出すのです。そして馬が歩んで行ってたまたまどこかの家の前で停まって草を食べましたら、娘はそこの家に嫁入りすることになっていました。（『山茶』一九八一年第一期。19頁）

楊秉有氏の言う彝族のこの独特な婚俗がどの程度定着した習俗であったのかは私は知らない。彝族は中国少数民族の中でも人口が多く広大な地域に居住し、すぐれた独特の文化を持つ民族である。楊氏がわれわれ彝族といているのは楚雄自治州の彝族社会のどこにもあった習俗なのか、四川省大凉山その他各地の彝族社会にも行われていたのかどうか、そもそもこの婚俗は彝族の間に生れたのか、寡聞にして私はそのいずれについても知らない。なお、百田氏は海南省の黎族の間に離婚するとき夫は妻に牛一頭を贈るのが慣習だといい、それは「牛の背に揺られて新しい夫を探せ」という意味がこめられていることを紹介している。（巖汝爛編、百田弥栄子・曾士才・栗原悟訳『中国少数民族の婚姻と家族』上巻。一九九六、第一書房、261頁）

西南中国や東南アジアには女性が彩毬を投げ、これを受けとった男、あるいは刺繍したハンカチを抛りそれを拾った相手を伴侶に選ぶなど独特な婚俗が行われていたといわれているから、騎馬招親・走馬定婚も実際に行われていた可能性がある。

古来、鳥獣に神異を認め、その所作などによって吉凶や今後を占う風習は世界各地に行われていた。古代中国には羊を使って犯罪者を探知する獬豸神判が行われていたといわれている。動物を用いて神意を窺う動物神判は各地で実施されており、中国西南地方や東南アジアでは近年まで続いている。（拙稿「日本和中国西南の神判」『西南中国諸民族文化的研究』一九九〇、中国西南民族研究会・国立民族博物館刊）背向騎乗や騎馬（牛）招親習俗の実態については今後の検討課題だが、炭焼き長者型民間故事中にみられるこれら一連の求婚モチーフはおそらく口述者の単なる思いつきから始まり広がったものではあるまい。

3

背向騎乗や走馬定婚・騎馬招親モチーフは雲南省など中国西南少数民族の炭焼き長者型故事に特徴的であるが、それらは牛馬などに霊能を認め、その導きによって天婚を実現するという趣旨のモチーフの特殊化したものなのか、それとも一部の彝族社会で行われていたという婚姻習俗が故事に反映したものなのか、婚俗と故事モチーフとの因果関係は目下のところ定かでは

なく、今後の検討課題とするほかない。

ところで牛馬が天婚実現の橋渡しを演じる故事は西南中国に限ったことではない。その東方地域にも伝承されている。広西壮族自治区の東部から湖南省靖県一帯にかける侗族社会に語られている故事「楊梅樹」にもそれが見られる。

（梗概）越の国王が3人の娘に「どんな婿どのが欲しいか」と訊ねると、長女は大臣、次女は將軍と応えたのに対し、末娘は「五穀を作る人」と言って勘当された。末娘は日頃可愛がっている白馬に乗り「私の住むべき家に連れていって頂戴」と声をかけると、馬はコックリ頷き、山路を進んで行って、見るからに粗末な小屋の前で停まった。末娘はそこで荒地を拓いて暮らす男と一緒に近くにある楊梅樹を三拝して夫婦の契りをした。楊梅樹は「2人は天意に叶った夫婦だ」と祝福し、そのとおりに幸せに暮らした。（採録者、路泉・呉登艷。『楚風』一九八四年第三期、20～21頁）

なお、この故事は末娘の天婚相手がかつてこの地方の農民一揆の指導者・楊四郎の世を忍ぶ姿であったとして、歴史物語の様相をおびている。

江西省東部、三江地区の侗族が伝える炭焼き長者再婚型の「竈王菩薩」故事にも騎馬招親モチーフがみられる。

（梗概）富豪が御曹司の運勢を占って貰うと凶と出た。富豪は福運の娘を嫁にしてわが家の財産を守ろうと考え、門に銀塊を吊るした。通る人々にはそれはただの木炭の塊に見えたが、乞食母娘が「このお屋敷の門に銀が吊ってある」と言った。富豪はその母娘をひきとって屋敷に住ませた。間もなく母親が亡くなった。時が経って富豪は娘を息子の嫁にした。だが、息子は仲間から「乞食女房の旦那さま」と揶揄われ、侮辱に耐えず妻を離縁した。岳父は彼女を気の毒に思い、財産を分けてあげるというのを嫁は辞退し、髪にさした金の簪を記念にし、厩舎に飼っている馬の中から全身糞まみれた黄馬1頭を貰って富豪の屋敷をあとにした。その汚れた馬は実は飛龍馬で忽ち天空に翔け昇り、やがてある山の上に舞いおりると、荒地を開墾し玉蜀黍を作って暮らしている貧しい家の前で立ちどまった。女は頼み込んでその家の嫁になり、金の簪をとって男に食糧の買物を頼んだが、里のどの店でもそれを受けとらなかったの、怒って家へ戻る途中、簪を川に捨てた。それが縁で2人は谷間の金鉞を手に入れ、大金持ちになり、町に出て大店を構えた。（邢公畹『三江侗語』一九八五、南開大学出版社、198～203頁）

広東省連南瑶族自治县にも黒衣役の靈馬の登場する炭焼き長者初婚型故事が伝えられている。

（梗概）昔、資産家に息子が無く、娘が4人居た。資産家は娘の中の1人に気に入った婿を

迎えて財産を継がせようと八方手を盡したが叶わず、娘たちはオールドミスになるといって苛立ったので、そのうち財産を分けて嫁に出すことにした。

資産家は自分の50の歳祝いに娘たちを呼んで自分の福寿について訊ねた。娘たちは沢山の財産を手に入れて嫁に行こうと父親のご機嫌をとった。ところが末娘はお世辞を言わなかった。父は「お前は眼があって眼玉の無い愚か者だ」と地団太を踏んで怒った。母親がとりなしたおかげで父親の怒りも少しはおさまり、結局、「盲目の馬1頭をやるからそれが停まったところの家の嫁になるがよい」と命じ、今日を限りに親娘の縁を切った。四女の騎った馬は歩み続け山奥のあばら家の前で動かなかった。そこは母親と溜真という名の炭焼きの暮らす家で四女と溜真はすぐさま天地を拝んで夫婦になった。〈「溜真焼炭仔」口述者、房加貴公。採録者、張景祥・許文清。連南瑶族自治县文化局『瑶族民間故事』一九八三、46～50頁〉

以下、四女が訣れしなに母親が与えた金貨を渡して買い物頼んだが、溜真が山を下りて町に行く途中、池の畔の枯れ枝に止まっている鵲鴿に握っていた金貨を磯代わり投げつけて手ぶらで家に戻り、それが縁で夫婦が山奥で木炭を焼く炭窯から黄金を発見して大金持ちになるのが、その顛末はわが国の炭焼き長者譚とほとんど瓜二つである。具体的な比較については機会をみてとりあげるつもりである。

同種の話は華中内陸部の湖南省にもある。省西部の湘西土家族苗族自治州鳳凰県のそれらは夙に凌純声・芮逸夫の『湘西苗族調査報告』（一九四七、国立中央研究院歴史言語研究所）に4話収載されている。そのうちの2話を松本信廣氏がその著書『日本の神話』（一九五六、至文堂）でとりあげ、私も別稿「炭焼き長者の話—柳田國男と松本信廣—」（三田史学会『史学』75巻2・3号、二〇〇七）にそれぞれ要旨を紹介したので詳しいことは省くが、1つは娘がお大盡の父親のすすめる婿候補を辞わり、貰った馬に乗って家出をし、馬の行きついた先の炭焼きの妻になった云々、もう1つはある男が占い師のすすめで貧乏人の娘だが福分のある女を妻に迎えたが、児が生まれその誕生祝いに、妻の里からの祝いの品が貧弱で世間体が悪かったので、馬1頭と何がしの銀子を与えて妻を離縁した。女は馬の行くにまかせて山中を進み、柴刈り男の住む荒屋に無理をいって泊めて貰い、その柴刈りの女房におさまった。

「灶神故事（甲）」と題した前者は見てのとおり炭焼き長者初婚型、「灶神故事（乙）」と名打った後者が同じく再婚型で、ともに女が夫に買物を頼んで渡した銀子が端緒になって夫婦がにわかに大分限者になったという話である。

凌・芮の報告書には「福德をもって生れた貧乏女（貧女富命）」と題するもう1つの炭焼き長者再婚型が載っている。

（梗概）お大盡の呉がゆえあって貧乏人の娘を妻に迎え、はじめは睦しく過ごしていた。ある日、2人は山に出かけ拾った栗の実で互いの運勢を占った。ところが何度占っても呉の運は妻のそれに劣ると出たので彼は悔しくてたまらず、「お前の運がそんなによいのだからこれ

からはひとりで生きていくがよい」といって縁を切った。思いとどまるようにとの妻の嘆願にも頑として耳を措さなかったので、女は止むなく1頭の馬を貰い呉家を出ることにした。彼女は地面に跪き天に向って

「これから馬に乗り、行くにまかせて参ります。穴があったら墜ち、水があったら溺れて死ぬかもしれませんが、幸いに人家に行き着いたら、金持ちの家であろうと貧乏人の小屋であろうとそこの家の者になります」

と祝祷し、馬の背に後ろ向きに騎って歩むにまかせた。陽が西山の端に落ちる頃、馬は山奥の草葺きの一軒家に辿りついた。内には老嫗がひとり留守をしていた。「これがご縁と申すものです。この家の嫁にしてください」と頼み、暗くなって戻って来た息子の女房になった。のち2人は白銀の山を手に入れて億万長者になった。(口述者・呉文祥。340～341頁)

因みに華中の炭焼き長者型には騎馬招親などの独特なモチーフは次第に姿を消し、この湖南湘西の背面騎乗モチーフは例外的な存在である。

湖南省東部の石門県盤石郷に伝わる「竈王じいさんと竈王ばあさん(灶王公和灶王奶奶)」の話。

(梗概)張旦那は結婚後20数年経ってようやく息子に恵まれたものの易者によれば将来家産を潰す運命だといわれ、その易者の見立てに従って吉祥の8字をもって生れた乞食の女兒をひとり童養媳として育てた。そして御曹司とその娘が適齢期になると、張旦那は兩人の婚礼を挙げた。しかしやがて御曹司は妻の出自を知ると離縁状をつきつけた。張旦那はどうすることもできず、欲しいものは何でもあげるから堪忍してくれと詫びると、彼女は「金も銀もありません。馬を1匹下さい」と言うので、旦那は彼女を厩屋に連れていき、好きな馬を選ばせた。彼女が「私を乗せていきたいと思うなら、頭を3度もたげて頂戴」と呼びかけると、どの駿馬もそっぽを向く中で、瘦せこけた老いばれ馬が首を3度上下し、女の前に近寄って来て腹ばいになった。女は涙を流しながら「どこかよい所に連れてってね」と声をかけて騎った。その老いばれ馬は3日3晩歩き続け、大きな河の河原にある萱葺き小屋の前までくると腹這いになり口から白い沫を吐いて気絶した。女がその首をかかえ自分の辛い運命を泣いた。その声を聞いて小屋から眼の見えない老嫗が出てきて彼女を小屋に連れ込んで世話をした。暗くなって息子が魚捕りから戻って来た。数日経ち、老嫗は若い2人に縁組をもちかけ、互に憎からず思っていた両者は夫婦になった。(口述者、文振彬<漢族>。採録者、汪沢。『中国民間故事集成 湖南卷石門県資料本』一九九六、236～241頁)

このあと漁師の夫はそれまで網にかかった黒っぽい苔むした塊をただの石ころと思って積んでいたのを妻の指摘のおかげで高貴な金鉱と知り、夫婦はにわか長者になった。おそらくこれは山賤の男とその妻が谷川で黄金を見つける長者譚のバリエーションで炭焼き長者ならぬ漁師長

者再婚型故事である。

もう1話。湖南省北部から毛色の変った炭焼き長者系の「司命神」と題する竈神の由来譚。新市市棠華郷新華村の伝承。

（梗概）算命先生（運命占い師）の見立てにより資産家の張が水呑み百姓の李氏の娘を息子・相公の嫁に迎えた。相公はそれが不満で毎日愚痴りそして妻を罵った。張旦那は止むを得ず駿馬1頭と多額の元宝を贈り、おそらく破綻をみるであろう息子の後日の面倒を頼んで見送った。李氏の娘は「馬の立ち停まったところが私の身の置きどころ」と祝祷し、馬の駆けるのにまかせて行くと、暗くなって山の麓にある草葺きの家の前で停まった。そこは年よった母親と2人暮らす理髪師の住まいであった。女は家の前に馬を繋ぎ、宿をお願いした。そして翌朝、女が元宝を渡して米を需めて来るように頼むと、理髪師はそれをしばらく不思議そうにみていたが「これなら家の裏にある」と言い出し、こうして理髪師一家は忽ちに大長者となった。（口述者、羅国珍。採録者、朱伝勇。『中国民間故事集成 湖南卷』二〇〇二、中国 I S B M 中心、487～488頁）

考えてみれば山中の理髪店も賃仕事をしているその職人が元宝を知らないこともそしてその家の裏に貴金属の山があることも些かおかしい話であるが、なぜ炭焼き長者型の故事の主人公に理髪師で出てくるのか何かわけありであろうか、いずれにしてもこの「司命神」故事は炭焼きや柴刈り・木樵を主人公にする話の変化形であることは明らかである。因みに標題の司命神とはここでは竈神のこと、張の息子がその後零落し、それとは知らずに訪れた理髪店で李夫人と出会い、恥辱に堪えず竈に衝突して頓死した。それを見た李夫人は昔、恩顧を受けた岳父に済まないといって、竈の後の梁に首を吊ってあと追い死を遂げた。この故事は2人が竈神とその夫人として祀られたという漢族社会に普及している炭焼き長者再婚型と竈神縁起の複合型を呈している。広漠な領域と複雑多彩な民俗文化を擁しているゆえ、中国の炭焼き長者型故事は日本のこの型の民間説話が比較的画一的であるのに対し、甚だ多様であるが、それはまた中国におけるこの民間故事が長い歴史を持っていることを物語っているのかもしれない。

湖北省三陝地方の民間故事「馬と銀子」の馬も離縁された女を幸せな結婚と財貨獲得への橋渡し役を果している。

（梗概）春先に嫁を娶って精一杯働かせ、秋の収穫が終った途端、穀つぶしは不要といって離縁を繰り返す強欲な小地主がいた。貧しい生まれの秀珍はそれとは知らず地主の何番目かの妻になり、それまでのどの女房よりもよく働き、例年にない収穫をあげたが、やはり1頭の痩せ馬を与えられて同様にお拂い箱になった。秀珍は嘆きながら馬の行くにまかせて森の中を行くと、老母と暮らす木樵の家の前に出た。彼女は木樵と夫婦になった。時が経ち2人の間に児が生れた。ある日、木樵は子どもの玩具だといって光る石ころをいくつかを携え

て戻って来た。秀珍が何気なくそれを見ると銀塊であった。彼女は急いで木樵を案内させ、銀塊を拾ったという山の洞穴に行き、運びきれない程の銀鉱を見つけて長者になった。(採録者、鍾家琮。「馬和銀子」『三陟伝説』一九八〇、338～341頁。宜昌。内部出版物で編者名、出版社名を欠落)

同省沔陽県で語られている民間故事「3番目の娘(三姑娘)」

(梗概) 昔、楚州に曾という財閥がいた。3人の娘がいたが跡取り息子がなく、それが悩み種でいつも苛々していた。ある日、3人の娘に「いつも食べている物は？」と訊ねると、上の2人は「もちろんお父様の物よ」と答えたが、末娘は阿らなかつた。父はカンカンに怒り直ちに家から追い出した。母親がとりなしても、父も娘も共に節を曲げず、困った母親は路銀として僅かの烏金(金銅の合金、貨幣の一種)を与え、馬小屋から驃馬を索いて来て娘を旅立たせた。驃馬は飛ぶように街や市場を過ぎ、たくさんの大きな村、小さな集落を通り貫け、人気の無い野山にやって来た。陽も落ち、末娘は「どうしてこんな辺鄙なところへ連れて来たのよ」と愚痴るうちに灯が1つ見えたので「出門人(旅人、嫁に行く人の意あり)です」と言って訪ね、そこに住む柴刈りの女房になることにしたが、食う物も着る物も無いというので、例の烏金を持ち出すと、柴刈りは一目見るなり「こんな黒い石ころなら柴刈る山のどこにもある」と言うので、2人は驃馬を曳いて山に出かけ、毎日それを掻き集めて驃馬に積んで運んだ。(沔陽県文化館『沔陽文芸』一九八一年第六期3版)

黄河沿いの河南省にも不幸な女と山仕事をする勤勉で温厚な男を結ぶ役獣の活躍する民間故事が多い。新郷県土門村の「竈祀り(祭灶)」

(梗概) 昔、孟姜女河の北岸にある張家荘に張万昌・郭丁香夫婦が円満に暮らしていた。ある日、2人の間に珍しく言い争いがあり、張が怒って家を飛び出したが折悪しく遊蕩児の王流子と出合った。王は「万昌兄い、まさか男一匹、女房を離婚して生きていかれないこともあるまいに」と嘲笑した。張は息もつかず家へ戻り、三下り半をつきつけた。丁香は仕方なく壊れかけた車と老いばれた黄牛を貰って張家をあとにした。黄牛は丁香的乗った車を曳いて疾駆し、橋のない孟姜女河を一瞬のうちに飛び越えて南岸の李家荘に来て停まった。そこには柴刈りや農家の日雇いして母親を養っている李万昌の粗末な家があった。丁香は媼に頼み込んでその家にあがり込み、山から帰ってきた万昌と夫婦になった。若い二人は朝は夜の明けないうちから仕事に出かけ星をいただいて家に帰り、開墾した畑も増え裕福に暮らした。張万昌の方は丁香を追い出してからは坂を転げ落ちるように零落して物乞いになり、丁香的家を訪れて自分の過去の仕打ちを悔やみ、竈にぶつかって即死し、丁香によって手厚く葬られた。(口述者、劉長啓。採録整理者、劉宜武。『中国民間故事集成 河南新郷県巻』一九八

同じ河南省桐柏県程湾一帯の民間故事『張郎、妻を離縁（張郎休妻）』

（梗概）貧しい張という男が勤勉な嫁を娶った。嫁は丁香とい、明るいうちは張と畑に出かけ、夜はおそくまで糸を紡いだ。おかげで張家は暮らしがよくなり、草葺きを瓦屋根の家に建て替え、倉も建て、牛馬を沢山飼った。すると張は仕事をせず飲み喰いにほほけた。そしてもっと大金持ちになりたいと思った。ある日、街で駱駝を牽く人相見に会い、自分の運勢を占って貰った。人相見は「旦那の運命はよいがどうも奥様のほうに問題がある」と首を左右に振った。張は家に戻るなり問答無用、丁香にすぐ出ていけと言った。余りのことに丁香は泣いた。そして金貨も銀貨も一切要りませんからあの古い車それに黄牛と雄鶏一羽をくださいと頼み、「牛よ、もしお前が私を金持ちの家に連れていったらお前を斬り殺す。もし貧乏人のところへ連れていってくれたら、ご褒美に美味しい草を食べさせてあげるよ」と言うと、黄牛は首を下げ尾を振った。黄牛の曳いた車はいくつも川を越え、村々を通り、暗くなって壊れた窯の前で停まった。媼が窯の中から出て来るのを見て丁香は車を下り一夜の宿をお願いした。丁香は媼に甲斐甲斐しく仕え、数日経って柴刈りの息子が町から戻ってくると、媼の望みに沿って若い2人は天地を拝んで夫婦の誓いをした。

勤勉な2人は雄鶏がときの声を聞くとすぐ起きて働き、やがて古い窯を壊して瓦屋根の屋敷を構え、蔵には食糧が溢れ、家畜小屋には牛や馬が一杯になった。

他方、張郎は丁香を追い出し、富豪の娘を後妻に迎えたが、その女は張同様怠け者の遊び好きで、田畑、家屋敷がつぎつぎに人手に渡った。後妻に見捨てられた張は骨と皮だけになって物乞いをして歩き、とどのつまりは丁香の鍋台（かまど）に頭を撃って死んだ。（口述者、梁智権。採録者、梁士東。『河南省桐柏県卷Ⅲ故事』一九八七、桐柏県故事集成総編集委員会、379～383頁）

4

畜生の牛や馬が、未聞未見の男女をめでたい成婚、そして人も羨む致富へと導く黒衣や人形遣いの役を果たす炭焼き長者型故事は江南地方、東シナ海沿岸の諸省にも分布している。江西省宜春市一帯に流伝している「竈王さんの来歴（灶王爺的来歴）」はその1つである。

（梗概）大昔、袁州府（江西・宜春）に張というお大盡がいた。齢をとってから儲った春宝を甘やかして育てたため、息子は意気地なしであった。張大盡は春宝が18の年、秀鳳という氣立てのよい賢い娘を捜して来て息子の嫁にした。見込み違わず秀鳳は万事にすぐれた女で、

そのため張大盡は金庫かねくらの鍵を彼女に預けておくほどであった。

やがて、老夫婦は相前後してこの世を去った。ある年の秋、白穀を食べる（新嘗の）日、春宝と秀鳳は新穀で互いの福分を占った。ところが秀鳳は大福、これに対し春宝が何度試みても惨々な結果であった。彼は悔しくてたまらず「お前に福があるというならひとりで生きていったらよかろう」と秀鳳を離縁した。嘆く秀鳳は「一夜ノ夫婦モ百日ノ縁と申します。仮にも妻であったご縁に免じ、せめて馬1頭と金箱1つをいただきたい」とお願いした。そして彼女は既舎に行き「どこか安住の地を連れてってくれる馬はいないかい?」と呼びかけると、大きな黄馬が寄って来たので金箱を携えて騎った。馬は直ちに地を蹴って飛ぶように駆けに駆けた。ところがやって来たのは奥山の深い林の中であったので、秀鳳は思わず自分の非運を嘆きながら馬を曳いてしばらく歩いていくと1軒の小さな荒屋が見えた。そこは戦禍を避けて暮らしていた母と若者の隠れ家であった。そこで厄介になった秀鳳は母子とそれぞれの身の上を語り合い、若い2人は結局夫婦の約束を交わした。秀鳳が婚礼の準備をと持参の箱から黄金の磚（煉瓦状の塊）をとり出すと、樵夫の息子が眼を凝らし「これなら林の中にいくらでもある」といい出した。（中略）前夫の春宝は秀鳳を追いつくと忽ち没落。最後は秀鳳の慈悲に縋ったものの恥じて竈に入り焼身自殺を遂げ、竈神に祀られた。（口述者、余才牙。採録者、李鑒。『中国民間故事集成 江西分卷、宜春市資料集』95～99頁）

豫南（河南省南部から安徽省西部）を中心にする地方で、講釈師によって唱えられる「竈書」が昔から人気を博してきたという。それは詩で綴られた台本で、中には一句七言、約一二〇〇句に及ぶ長編（但し曲譜は現存しないという）もあり、木匠・大工集団の間ではとくに愛唱され、夜間、歌劇として演じられることもあるという。（楊紆如「紹介唱灶」中国曲協研究部『曲芸芸術論叢』一九八一年第二期、中国曲芸出版社、60～64頁）その普及ぶりも想像されるというものであるが、その内容は中国東部に広がる張（稀に趙など）・郭（稀に葛など）夫婦をめぐる竈神縁起故事を素材にしている。これも一種の炭焼き長者再婚型でバリエーションが多いが、大要は勤勉貞淑な郭丁香が他の嬌婦の色香に惑った夫の張に追い出され、牛車に乗ってさ迷った末に、范三郎という朴訥な柴刈りに声をかけられてめおとなり、産を築くという物語である。（採録者、曹家振・彭華后・李海華。「郭丁香（豫南民間伝統灶書）」『民間文学』一九八一年第十期、29～49頁）

つぎの河北省藁城県耿村の「離縁（休媳婦）」故事も基本的には上掲の「郭丁香」と同内容である。

（梗概）大金持ちの孫旦那が廟の縁日で人相見（人面観）に自分の運勢を観て貰うと「旦那様の運は奥方の福運次第。観るところ旦那様は奥方無しには乞食間違ひ無しです」とのご託宣であった。すっかりプライドを傷つけられた孫はプリプリ怒りながら戻ると、妻の顔を見るなり訳のわからないことを喚き、即刻離縁だと怒鳴った。妻が何を言っても耳を貸さない

ので、与えられた痩せ馬に騎り泣きながら孫家をあとにして行く当てのない旅を続けた。陽が西の空にすっかり傾くころ、馬は疲れてある草葺きの家の前でもう動かなくなった。家の中から媼が顔を出し、若い女を見て同情するとともに彼女を気に入る、出稼ぎのため留守で独身の息子の嫁にとひそかに期待して、しばらく家にひきとめておいた。そしてやがて戻って来た息子に女を妻はせた。その後、女がたまたま躓いたところで銀塊を見つけたのが発端で夫婦はたくさん銀を手に入れて大金持ちになった。(口述者、崔小英。採録者、秦秀英。『耿村民間故事集第二集』552～554頁)

山東省にも同じモチーフを持つ同型の民間故事が少なくない。膠東地区西部の「竈王の来歴(灶王的来歴)」は『民間文学』一九五七年第十二期に発表され、間もなくわが国にも紹介された。(飯倉照平「かまどの神」、中国の会編『中国』№49 一九六七年十二月号、徳間書店)その概要は張郎が老いた両親の面倒を妻の丁香にまかせて長い歳月、家を留守にした。その間、両親が相ついで亡くなり、金目のものをすべて売り拂ってようやく葬式を出すなど惨々苦勞を重ねた。10年も過ぎた頃、張郎は遊妓を伴って戻り、いきなり丁香に三下り半をつきつけた。追われた丁香は山中で柴刈り稼業の男に遇ってその女房になったという内容であるが、この2人を結びつけた繰り師の役割を牛が果たしているが、その間の経緯は次のとおりである。

張郎は(中略)【丁香に】「老いばれの牛と古い車をお前に呉れてやるからサッサと出て行け」といった。(中略)何を言ってもどうにもならず、自分の身の回りのものをとりまとめ、件の老牛を連れ出して古ぼけた車を曳かせた。さりとて丁香には行くべきところとて無く、牛の行くにまかせるほかなかった。(中略)丁香は牛に声をかけた。「どこに連れて行くつもり。もし【どこかの】人家に連れて行くなれば金持ちの家は嫌やよ。貧乏人のところへ連れてっておくれ」牛は頷き走った。(採録者、呉子信。44～49頁)

南船北馬の比喩のとおり、江南地方では物資の運搬や人の移動には主に船舶が用いられるせいか、炭焼き長者型故事にもしばしば舟船が登場する(別稿「東アジア各地の炭焼き長者の諸相」未刊)が、馬の例も無いわけではない。

一九四九年、革命政權が樹立されて間も無い五五年四月、中国口承文芸学界の機関誌『民間文学』が創刊され、民間故事の採録活動が盛んになった。つぎの「郭丁香と張大郎」は一九五七年に陳瑋君氏が浙江省内で採集した炭焼き長者系の民間説話である。

(梗概) 桑河畔の張家玻璃集落に張大郎という小金持ちがいた。大の怠け者だが、働き者の器量よしで評判の郭丁香をものにしようと、彼女の両親にいろいろ画策した。両親は山のように積んだ聘物につい眼が眩みとうとう娘を張家の嫁にした。ところが3年も経たないのに町からやって来た万事派手好きな海棠にすっかり気が移り、その女に3年経っても児を産まな

い丁香を追い出せと唆されてその気になった。丁香が泣いて義父母に訴えたが「夫婦のことは夫婦で始末しろ」ととりあわず、諦めた丁香は家畜小屋に行き、牛馬に向って「誰か私と一緒に行かない？」と呼びかけると、1頭の牛が尾を振って寄って来た。丁香は牛車に乗り下婢に曳かせて行くと、やがて空が薄暗くなる頃、牛車が丘の上の竹林近くで停まり、傍の茅屋に暮らす柴刈りの范三郎と夫婦になった。彼らはコツコツ働きやがて産を成した。（『民間文学』一九七九第六期、88～95頁）

中国大陸の東に移るに従って、背向騎乗や走馬定婚モチーフは影が薄くなるものの炭焼き長者型故事、就中その再婚型に女が牛馬に乗って嫁ぎ先をあとにする話が頻繁に出てくる。それは乗り物の無かった昔、広い中国では長い道程をはるばる移動するには何より役獣が便宜であったことを反映しているに違いないが、しかし何といっても尋常でないのは当該女性が自ら請うて牛馬を貰うけること、とくに強欲非情な亭主が見るのも嫌になって追い出す女房に進んで牛馬1頭を贈っていることである。これは西南中国の民間故事に婿選びに出かける娘に、あるいは追い出す女房に牛や馬が与えられること、とくに伝えられるところの雲南彝族の間に行われた走馬定婚の習俗、海南省の黎族の間で亭主が離縁する女房に牛1頭を贈るという習慣と何らかの脈絡があるに相違ない。

これらのことに関連して誰人も気づくに違いないことは、わが北日本の炭焼き長者譚再婚型に、出戻る女が牛や馬に騎って嫁ぎ先を追われる話が少なくないことである。本論の1の部分を変更して披見し再読して貰う労を省くため、以下に上掲以外の類話を含めてそのいくつかの要点を列挙する。

青森県木造町

倅（夫）は嫁が気に入らず赤い牛に乗せて追い出した。（『木造町のむかしコ集第2集』）

同 県八戸市

男は嫁に牛を一頭やって追い出した。（『南部昔こ集・八戸地方の民話』）

秋田県由利町

亭主が（中略）「牛一匹をやるから何処へなりとトットと出て行け」といった。（『羽後の昔話』）

宮城県多賀城市

嫁に牛一頭くだけで追い出した。（『みちのくの海山の昔話』）

千葉県長柄町

【亭主が】赤飯をたき赤牛に女（嫁）を乗せ強ひて野に放てり（『南総乃俚俗』）

新潟県五泉市

【旦那は女房を】嫌い、牛一頭を与えて離縁した。（『日本民俗学会報53』）

同 県長岡市

よめが、うちを出るとき、馬一頭もろていったてんがの。(水沢謙一『おばばの昔話』)

日中間のこの類似は偶然でないことはほぼ断定しても強い反論はおそらくないであろう。かつて柳田國男が日本各地に炭焼き長者譚が分布していることについて、

自分はたゞ此ほどの奇抜にして且つ複雑な話が、此ほどの類似を以て【日本の】各地に偶発することは無いと信じ(以下略)(『海南小記』『柳田國男全集』第三卷、筑摩書房、359頁)

と述懐しているが、この文言を真似て言えば、これほどの類似をもって日本と中国各地に偶然に発生することは到底あり得ないと信じる。問題はどのように類似した民間説話がどのようにして日中間に流布しているのかであるが、それは最も知りたい重要な課題であるとして将来に托すはかない。しかし両国のこの型の類似はわれわれの想像以上に密接な関係に基くものであったと考えられる。たとえば中国の一連のこの型の民間故事は女の騎乗する牛馬について、単に牛とはいわずにわざわざ黄牛と称する例が多い。黄牛とは東南アジアから中国に分布する、肩に小さな瘤のある家畜牛で、体色は薄茶または暗赤色のいわゆるアカウシのことであるが、わが国の炭焼き長者譚でも婦女を乗せて未知の男のもとへ連れて行く牛を単に牛とはいわず殊更に赤牛と称している例が少なくない。念のため既出の資料を含めそのいくつかを略記する。

新潟県南蒲原郡下田村

女は二百両と赤牛を夫から貰って婚家を出た。(『南蒲原郡昔話集』)

千葉県長柄町

倅は嫁が気に入らず赤い牛にのせて追い出した。(『南総乃俚俗』)

これらの牛馬の行き先は町でも村でもなく必ず人里離れた山中の1軒家であるが、つぎの例などはじめからそうときめてかかっている。

青森県木造町

お嫁さんを赤い牛に乗せて遠ぐの山の中の一軒家近くまで追い出してしまったど。(木造町教育委員会『木造町長寿大学』No19)

同じ話型、その中の女人騎乗の出家モチーフ、さらに騎乗する家畜牛の種類しゅつぐの共有—これらを見ても日本の炭焼き長者譚が中国のそれらと仿製品の関係にあるという可能性を考えざるを得ないが、類似はこれにとどまらない。

5

川野明正氏に「日朝中の霊物信仰にみる特定家庭盛衰の伝承・ザシキワラシ・トッケビ・山魃・五通神・小神子・その他」という長い副題のついた「東アジアの運搬霊信仰」という論文がある。(北海道大学『饗登』第12号、二〇〇四)これは我が国の東北地方の俗信として著聞するザシキワラシ(座敷童子ざしきどうし)に代表されるような「富の運搬に関わる霊物」をめぐる比較研究

である。同氏は「使役靈的性格がある」これらの「運搬靈（中略）は、富（財物・ないし福、善き物全般を含む）を贈与するが、福神的性格のみならず、富や福が【を？】此処から彼処へと移動するという性格」をもつ靈物であると定義している（『饕餮』第12号、二〇〇四 8頁）。

ところで運搬神の運搬とは改めていうまでもなく日本語でも漢語でも運ぶこと、運輸、物の移動、transportationのことであるが、漢語ではこれを搬運ともいっている。その搬運を使用した「搬運神」と題する民間故事（朱柴龔採録）が朱雨尊編『民間神話全集』（一九三三、普益書局出版、172～175頁）に収載されている。その内容についてはすでに拙著『中国民話の旅から——雲貴高原の稲作伝承——』（一九八五、日本放送出版協会、46～47頁）で紹介したので要点だけにとどめるが、これはわが国の「舌切り雀」や「花咲か爺」（中国では「兄弟分家」「狗耕田」など）のような勧善懲悪をテーマにした説話で、亡父の遺産分けに際し、狡猾な兄は広い良田を独り占めにし、お人好しの弟には山の痩せた荒地しか与えなかったという発端の「隣りの爺」型の説話である。天神はこの兄弟をみて、乞食に扮して弟の前に現れ、彼の善意、惻隱の情を確めたうえ、山の泥土を掬って、願えば欲しいだけ金をもたらす小李と名づけた小さな土人形を作って授けた。それによって大いに栄えた弟をみて、欲深な兄は自分の田圃を弟の山の畑と交換したうえ、天神にねだって小李より大きな大李という土人形を拵えて貰い、大喜びしてそれを携え、急ぎ家に戻る途中、土砂降りの雨に見舞われ、大李は融けてあとかたも無く消え失せてしまった。

この故事のタイトルの搬運神とは弟に巨富をもたらしした小李、つまり善良な弟の使役靈的存在を指しているが、本質的には弟を大長者にした真の搬運神は天神そのものということになる。それはそれとして、富や福を運ぶ靈物を、以下で私は敢えて福運を目的語にする搬運神の用語を使用する。この方が日本語では単に物を運輸するというニュアンスの運搬神よりも福・富をもたらす靈物の本質を表していると思われるからである。

さて、川野氏の上記の論文では触れられていないが、炭焼き長者型民間説話で、生まれも育ちも違う男女を結ぶ「赤い糸」の牛馬は単なる黒衣ではなく、むしろ搬運神の靈物であったとするのが相応しい。そうはいつでもこれら靈物は天婚を実現させたのは確かだが、その夫婦を具体的な財宝の所在へと誘導したのは牛馬そのものではない。それを現実のものにしたのは別の靈物であった。

炭焼き長者譚の最高のクライマックスは何といっても山住みの貧乏男と高貴な押掛け女房が思わず交わした会話を転機に、夫婦が一躍天下の大分限者になった点にある。この見事な大転換はわが国の炭焼き長者譚ではおおむね2つのタイプに分類される。1つは今日食べる物もないと知った押掛け女が、それではこれで買い物をと渡した貴金属を見て、山賤（がっ）が「こんな物なら俺の働く山中になんばでもある」と洩らしたこと（秋田県山本郡琴丘町 琴丘教育委員会『琴丘の民話』一九七四、自刊、93頁・兵庫県朝来郡和田山町 立命館大学古代文学研究会『糸井の民話』一九七四など）、もう1つは男が新妻に促されて町へ買い物に行く途中、出遭った動物を恰好な獲物とばかりに持参（きんす）の金子を擲（な）げつけて手ぶらで戻り、「あれはこれこれしかじかの高價

な物」と妻に咎められ、男が同じような不服を口にしたことであった。理屈をいえば、米や酒などを買うために手渡された金品を見た時点で、その価値に全く無知な男が不審を曳らす前者の方が道理であろうが、話としてより面白いのは後者の方である。わが国の昔話研究者が炭焼き長者の話といえは専ら後者のモチーフを問題にしてきたのもゆえなきことではない。

柳田國男も夙に後者に強い関心を寄せた。柳田は、炭焼き夫婦が最高の幸運を手にする直前に、世故に疎い夫が町に買い物に赴く途次、

「必ず水鳥の遊ぶ水の辺を過ぎて天下の至宝を無益に礫に打たずんば止まなかった」と述べ、さらに

「其鳥は神佛の化する所にて、夫婦を導いて新たなる【金銀の】発見の端緒を得せしめた」（『海南小記』『柳田國男全集』3、一九九七、筑摩書房、357～358頁）と説いて、金子とただの石ころの区別も知らない山男の愚行が金銀大発見のそもそもの始まりであったが、それへと導いたのは水辺の鳥であったと述べ、さらにその水鳥こそが神靈に他ならないと強調している。

炭焼きによって金子の礫の標的になったのは確かに水鳥が多い。岩手県紫波郡紫波町赤沢の「炭焼き藤太」の昔話でも、藤太が町にさかなを買いに行く途中、夕餉の獲物にしようとして小判を擲ったのは池の鴨であった。（中村政太郎『心のふるさと・赤沢の民話』一九七三、紫波町）長野県上伊那郡中川村の「炭焼き吉次」も、大坂の富豪・鴻の池の娘が托した小判を吉次が無益にも投げ打ったのは淵に遊ぶ鴛鴦であったと伝えている（小沢・福原・森野『日本の民話5 甲信越』一九七九、ぎょうせい、194頁）。

金銀の礫の対象の水鳥を鴨（鹿児島県・下甕，他）、鴛鴦（香川・丸亀，他）とする話が比較的多いが、木の枝にとまる鳥のほか、川面に浮かぶ鵝、池の雁、水田に下り立つ鷺、池の鴻^{くぐい}、はては水たまりの鶴など、まことに多種多様である。なお柳田は『海南小記』の中で、これらの水鳥の類に触れて「水に乏しい南の島々では黄金を【小石がわりに】鳥に擲つ話は既に聞くことは出来ぬ」と述べているが、それは執筆当時は採集例が無かったせいであろうか、水辺の少ない沖縄本島にも田圃の鷺（具志川市）、さらに小さな離島にも池の鴨（八重山・与那国）の登場する昔話がある。

市へ買い物に出かける道中、炭焼きたちが恰好なさかなの材料とばかり狙い定めたのは水辺の禽鳥類ばかりではない。池の鯉（山梨・三珠町、愛媛・小田町，他）や亀（群馬・松井田，長野・下水内・栄，他）という話もある。水中の魚を小さな礫で捕えられるか些か心もとないし、空中での飛翔とは全く無縁な亀はなおさらであるが、ただし亀の方は鶴に誘われて登場した縁起物か、さもないければ圧倒的に例の多い鴨からの訛変かもしれない。とにかく金銀の礫の標的のバリエーションは目まぐるしい。数の中には水辺を離れた山中の雁（島根・広瀬）や雉・山鳥（岩手・江刺）という話もある。

搬運靈的動物は鳥類とは限らない。たとえば島根県大田市（旧安濃郡鳥井村）に伝わる昔話。

（梗概）昔、分限者の酒屋の娘が大の酒飲みで、そのため勘当された。娘は大判小判を持っ

て江戸に赴き、手相見に見立てて貰うと、佐渡の国の某村の何兵衛を頼れと言われた。はるばるその某村の何兵衛を訪ねて行くと、男は笹小屋で侘び住まいの炭焼きであった。娘はそこに泊めて貰って翌日、米を手に入れて来るようにと大判1枚を炭焼きに渡すと、男は途中、鷺に投げつけ手ぶらで戻って来た。娘は呆れ、これは大金だと念を押して再び大判を握らせたが、今度は町へ行く途中、犬に吠えられてまた投げつけた。

（森脇太一『富山と鳥井の昔話と民話集』一九六四，自刊，9頁 但し『日本昔話通観18 島根』一九七八，同朋社，266頁による）

以下、詰じる女に「あんな物なら背戸にいくらでもある」と応じ、それを契機に炭焼きは金山の採掘を稼業として財を成し、酒屋の娘と夫婦になって裕福に暮らしたという。

松本信廣氏は炭焼きが礫代わりに金銀貨幣や砂金の包みを空しく投擲したことについて、次のように述べている。

【彼が】長者になるきっかけは、一方では水鳥、他方では犬が糸口になるが、こういう動物の介在はけっして偶然ではなく、深い理由があったのではなからうか。（『日本神話研究の進み』松本編『日本民族文化の起源1 神話・伝説』一九七八，講談社，106頁）

と述べ、また場所を更えて、

福分のある人間がその福分のために裕福になる（中略）その福分というのが犬であるとか、あるいは馬であるとか水牛であるとか、なにか動物で象徴されている。つまり、その人の守り神なんですね。守り神の精霊のおかげで、その男がどんなに貧乏であっても（中略）出世して、突如として金持ちになる。（『大陸と日本』『上掲書』290頁）

と説いている。

両先学の高説について忌憚なくいえば、金銀の礫の標的になった水鳥や犬を、縷説してきた搬運神的靈物としての牛や馬と全く同列に論じていいのかどうか疑問が無い訳ではない。理由は少なくとも3つある。その1つは中国の民間故事の中には金子・銀塊の価値に無知な男が小石のつもりで擲った対象は必ずしも水鳥でも吠える犬でもない。貴州省望谟県伝承の炭焼き長者初婚型故事では野良猫であり（『貝外女婿』『貴州民間文学資料集第43集』，一九六三），福建省に流布する「青蛙筆」故事では、投擲の有無を言明していないが、獲物として追った野兔が洞穴に逃げ込み、それが黄金発見に繋がったと語っている（『水蛙筆』『民間文芸選輯 第一集』一九五四，華東人民出版社，65～72頁）が、これらの動物も靈物と見做してよいかどうか。尤も猫も兎も故事の伝承過程で犬から変化したとすれば疑問は別であるが、しかし逆に犬も水鳥もそして鯉や亀や山鳥も野良猫や野兎同然、市場に赴く炭焼き男の前にたまたま出現した鳥獣類の1つに過ぎなかった可能性も考えてみなければならないかもしれない。

第2はつぎの第3点とも関連することであるが、水鳥や犬は結果的に致富の発端になったと

しても、むしろ、餉の材料として獲物の対象にされたに過ぎず、直ちに富の将来霊物ではないかもしれない。尤も世には「小を捨てて大をとる」とか「海老で鯛を釣る」などの譬えもあるから、鳥や犬は消極的、受動的な搬運神であるという理屈がなりたつかもしれないが、それにしては回りくどい話である。抑々民間説話にはそういうくどい謎めいたことや隠喩的・逆説的表現は似つかわしくないように思われる。

第3の理由はより具体的な根拠に基く。中国の炭焼長者型民間故事にも金銀貨幣の飛礫の標的として鳥や犬が登場するモチーフが見られる。広西壮族自治区合浦県の民間故事「黄金与塩草(黄金与塩草)」にもそれがある。

(梗概) 父親に勘当された娘がやって来て樵夫に買物を依頼した。樵夫は町へ行く途中、嘸みつかれそうになった犬に手渡された金子を擲げつけた。(『婦女雑誌』第七卷十号)

凌純声・芮逸夫の『湘西苗族調査報告』(一九四七)の中の「灶神故事」(甲)(炭焼き長者初婚型)、同(乙)(同再婚型)にも同様なモチーフがあり、類話は決して稀有ではない。興味深いのは雲南省大理白族自治州の洱源で採蒐された「王女と炭焼き」の故事にも金の礫で追われる吠犬が出てくる。

(梗概) 炭焼きの張保君が花嫁の王女に銀塊3粒を与えられて町へ米を買いに行った。すると乞食が大きな赤犬に嘸みつけられそうになっている。炭焼きはとっさに銀の礫を1粒、猛犬めがけて擲げつけた。(李星華採録『白族民間故事伝説集』一九五九、人民文学出版社。君島久子訳。一九八〇、三弥井書店、134～143頁)

この故事を興味深いといったのは、入念なことに残りの銀2粒もつぎつぎに投擲していることである。その対象は田圃の稲を啄む雀の群、そして玉蜀黍畑を踏み荒らしながら作物を喰う馬である。

雀を銀の礫でうつ話がでてきたついでに、水辺の鳥と金貨の礫のモチーフの類話を1つ掲げる。前出の広東省連南瑶族自治县伝流の「炭焼きの溜真(溜真炭仔)」の話。

(梗概) 押掛け花嫁に金貨を渡されて酒や肉などを買いに山を下りると、池の畔の木の枯れ枝に止まっている鵲鴿が水中の魚を狙っていた。炭焼きは鵲鴿めがけて金貨を投げつけたが鵲鴿は飛び去り、金貨は水面に消えた。炭焼きは慌てて池に入って探したが見つからず、手ぶらで戻ると、悲しむ新妻に金貨の価値を淳々と説かれ云々(『瑶族民間故事』46～50頁)

炭焼き長者譚に出現する水鳥や吠える犬を神の化身だとか守護霊だとする根拠は必しも闡明ではないが可能性を否定しない。犬の靈性についてはかつて拙著でも論じた。(『花咲爺の源流』

一九七八、ジャパン・パブリッシャーズ)しかしこの型の説話でそう断定するには中国の同型故事に登場する飛鳥や狗犬との比較を度外視することはできない。もし金銀礫の獲物と目されたわが国の鳥や犬が真に神の化身であり、特定の人物の守護霊であったとすれば、中国の同類の鳥や犬もまた同様であった可能性があろう。もしそうではなく、中国のそれらが尋常卑俗な鳥獣に過ぎないとすれば、わが国の神の化身の水鳥や守護神としての吠え立てる犬はわが国の民間信仰が換骨奪胎し再生したものであって、そこに日本口承文学の特色の一端を垣間見ることができよう。さらにもしそうではないとすれば、そこにわが民俗学界のいき過ぎた思い入りがあったといえるだろう。ややもすれば日本の斯界は何事も超自然的存在に関係づけ、神の恩寵・神霊の懲罰に仮託して昔話伝説研究の究極の解決として安住する傾向が皆無とはいえない。ことは一羽の水鳥、一匹の犬に終わらない深刻な問題を孕んでいるのかもしれない。改めて検討の余地無しとしない。

ところで本稿の冒頭でとりあげた沖縄宜野湾の昔話に一旦たち戻る。亭主に叱られて行きどころがなくて困惑する主婦が、雀に導かれて山の炭焼きの倉へいく話である。柳田はその小さな鳥に天婚実現の搬運霊を見ようとしたことは既に紹介した。

わが国には古くから穀霊と鳥とを同一視する信仰があった。『豊後国風土記』国埼郡田野の条や『山城国風土記』逸文の「餅的」の伝説は夙に著聞している。奢る長者が標的にして矢を射た餅に羽根が生え、鳥に化して飛び去った。前者(原文は漢文)はそれ以来田野の長者の家は衰え没落したと誌している。因みに餅の化した鳥を「白鳥」と表記しているが、後者(和文)では「白い鳥」としている。その白鳥、白い鳥がどんな種類の飛鳥であったかは共に明言していないが、おそらく今日いうスワンの類ではないと私は思っている。卑見では白鳥の白は聖色を表わしたか、さもなければ餅の色、米の色と関係したのではなからうか。

白い鳥が穀物とアナロジーで語られる話は現行の昔話にもある。1例をあげる。鹿児島県大島郡喜界町の伝承「運定め話(一)」。(口述者、富実禎)

(梗概) 親が決めた結婚だが、亭主は女房を嫌って子どもともども追い出した。途端に倉の屋根から白い鳥が飛び去り、亭主の家の財産が見る見る減った。女房は遠くの村でよい主人を見つけ暮らし始めると、忽ち富み栄えた。(岩倉市郎編『鹿児島県喜界島昔話集』、一九七四、三省堂、92～94頁)

倉庫の貯蔵物と飛ぶ鳥を同一視するモチーフは先年中国で採録された民間故事にも少なからず認められる。2話をあげる。1つは浙江省富陽県に伝わる「天・地次第、おのれ次第(靠天靠地靠自己)」

(梗概) 父親の意に媚びない返答をして勘当された末娘が貧しい樵夫かきあの嬢になった。やがて生まれた息子が10歳の頃、戸外で遊んでいて金銀の詰まったをみつけ、急ぎ家にかえて母親

に告げた。母親がその場所にやって来て燭香をともし「もしこれが息子のものなら麻雀（未詳。麻雀，つまり雀か）になってわが家に飛んでいけ」と祝祷すると，そのとおり缸の中の金銀が飛び出して来て樵夫夫婦の家の中が金銀で満ち溢れた。（『民俗週刊』一〇七期，一九三〇，中山大学，10～11頁）

この故事は野外で遊ぶ幼童にまつわる金銀発見の話である関係か，話の中に倉も穀物も出てこないが，つぎの江蘇省無錫市北郷伝流の「運命の話（運命的故事）二」には蔵もその貯蔵物も語られている。

（梗概）金満家の張旦那は大きな屋敷と広い田畑，それに金銀の蔵を持っていた。除夜に家族と食事中に福分が話題になった。妻も息子も父親の福分を褒め讃えたが，娘は「人にはそれぞれ福分が備わっている」と答えた。夜が明けて元旦，腹を立てていた父親が，年糕（正月の祝いの餅菓子）を貰いに現れた乞食に，驚きたじろぐのも構わず，銭を添えて娘までも無理矢理嫁にして押しつけた。

ところが張家に奇妙な事が出来た。娘が出て行くとき一日中屋敷から雀が飛び出した。凶作の年で年貢米のあがりが悪かったので，張旦那が蔵を開いて金銀をとり出そうとすると，鍵は自分の手にあるし封印もそのままなのに，中の金銀は悉く消え失せていた。その後，落ちぶれた張が娘夫婦から不思議な雀の話（^{しつない}）を聞かされた。若い夫婦の家に毎日のように雀が飛来して倉庫が金銀で満ち溢れているという話である。（林蘭『雷売りの董仙人（董仙人売雷）』一九三一，上海・北新書院，72～77頁）

沖縄・宜野湾市やその周辺の雀が女を至福へと導く一連の昔話は，東シナ海を挟んだ対岸の中国江南の搬運霊としての雀の故事とつながりがあるのではないかと考えている。但し，先を急ぐので類例を博搜して将来の課題として措く。

6

わが国の新潟県栃尾市比礼に伝承する昔話「アワー石と青竹一本」は炭焼き長者型説話のそもその形を垣間見せる資料の1つではないかと思っている。

（梗概）産神の会話を耳にした素封家が，わが家に生まれた息子に隣の貧しい家に生まれた福運のある娘を進んで許婚者に決めた。年頃になり二人を夫婦にすると，その素封家は増々身上がよくなった。だが息子が嫁を嫌って縁をきると，家は見る見る没落し，息子は竹細工を作って商う身分になった。他方，出戻り女が山仕事をしている男のもとに身を寄せると，その貧しい山賤の家にはいいことばかり続き，新しい田圃をつぎつぎ拓き，やがてしんでん

日本各地の炭焼き長者譚，とりわけ再婚型はおおむねこのような構造の話である。つまり福
のある女の移動に伴って繁栄もまた移動するというテーマの説話だが，つぎの愛媛県上浮穴
郡不二峰の「炭焼長者」（杉岡満造老談）はその繁栄を具体的に財物の神々の転居として語ってい
る。

米や麦などの穀霊や財物類の精霊の移動はさまざまな姿をとって現されるが、鹿児島県大島郡伊仙町の昔話では白い蛾の去来によって語られている。

奄美地方には類話がみられる。徳之島にも嫁が婚家を去ると、倉から蛾がいつせいに飛び立って山の方へ行くので、嫁があとを追って奥へ奥へと歩いて行くと炭焼きがおり、彼と夫婦になり富み栄えたという昔話である。(田畑英勝『徳之島の昔話』一九七二、自刊、158頁。『日本昔話通観25、鹿児島』一九八〇、同朋社、9頁による)

しかし改めて問うてみたいのは、この説話の女主人公と彼女に随伴し、あるいは先導する搬

運神（霊）との位相関係である。行き先を失い、嘆き悲しむ女を一転して幸福の絶頂へ導くのが搬運神であり、搬運の霊物であるからには、おのずから主従の関係が明々白々だといえるが、必ずしもそうとばかりはいえない。

鹿児島県大島郡宇検村生勝では両者の位置は少しばかり違っている。

（梗概）7つの倉をもつ金持ちが、妻の炊いた麦飯にけちを付け、飯碗や鍋まで庭に投げ捨てた。妻が「この家の世帯は私のあとについて出る」と言って夫の家を出て別の男に嫁入りした。その再婚先に前の夫が乞食に落ちぶれて物乞いに現れた。（山下欣一・有馬英子『日本の昔話3 久永ナオマツの昔話』、一九七三、日本放送出版協会、78頁）

もう1例。同郡徳之島諸田の昔話。

（梗概）「竹一本」という名前の男と「塩一斗」という名の女が夫婦になり、やがて7つの倉を建てた。しかし、富むにつれて夫は傲慢になり妻を虐待した。彼女はいたたまれず、三合の酒を貰いうけて家を出るとき、七倉の前に跪き「私に授かった富はどうか私について来て」と拝んだ。女が当てどもなく行くうちに、炭を焼く爺の山小屋に着いた。持参の酒を爺にすすめると「炭消し水よりもまずい」と言うので、女もその水を飲み、ともに語らい一緒に暮らすことにした。そのあと、女はその「火消し水」を里の村々に商って歩き大いに稼ぎ、7つの倉を建てた。（水野修『徳之島民話集』、一九七六、西日本新聞社、147頁。『日本昔話通観25、鹿児島』一九八〇、同朋社、11頁による）

後半は酒泉発見モチーフと複合している。しかし出戻り女が前夫の家から持参した酒を口にしたり炭焼きが遥かに美味しいと自負する山の水によって夫婦が巨財を為すというこの話の構図は、女性の携えた金銀貨幣が無益な礫と化したおかげで財宝の山を発見するというそれと底通している。

結婚と離婚によって表現される福運のある婦女の進退・去来に伴う富の増殖と消失のテーマは、わが国よりも中国の民間故事に数多くかつ具体的に活写されている。

まず、江蘇省大豊県の「張郎、妻を離縁（張郎休妻）」の故事。

（梗概）「福の神（活財神）」の葛丁香が張郎に嫁ぐと張家は日増しに繁栄した。だが放蕩息子の張郎はまともな仕事につかず日夜遊び呆け、果ては丁香を嫌って離縁した。丁香は昔から「好イ女ハ二夫ニ仕エズ、好イ馬ハ振り返ッテ草ヲ喰ワズ（好女不配二夫、好馬不吃回頭草）」といって拒んだが、張郎は強引に妻を追い出した。丁香は張家に訣れ難く、1里行っては張家を振り返えり、また1里行っては何々を振り返えり、こうして10回も寝台と嫁入り道具、

長持ち（中略）倉一杯の金銀と穀物、そして張家所領の莊園を振り返った。するとそれらの財物が悉く丁香に随っていき、張家は忽ち左前になった。（中略）丁香は若者に出遇い、彼が母親と暮らしている廃窯（瓦を焼いた古い窯）に行ってみると、その周圍に山積みに放置されている煉瓦の破片などがすべて金銀であった。やはり丁香は福の神（招財頭）であった。（口述者、楊広順。採録者、沈澄・丁晗。『中国民間文学集成 大豊県故事資料本』、一九八七、253～256頁）

1 里去るごとに振り返りを繰り返す台詞は演劇的である。安徽省をはじめ江南地方には廬劇が盛行した。「張郎休妻」の出し物の一場面を彷彿させる内容の民間故事である。

次に河南省唐河県伝流の「竈さんの由来（灶爺的来歴）—唐河伝説之二—」

昔、素封家の張夫妻が年越しの菓子を作りながら胡桃を割って核の有無で福分を占い合った。凶と出た張は納得せず、妻と言い争った末、夫婦訣れをした。

妻は足まかせに歩き、日暮れ時、村はずれの草葎き家の入口に老嫗が坐っていたので、頼んであがり込み、帰って来た独身の息子に女房にして欲しいと申し入れた。（以上梗概）

張家を離縁された婦人はもともと福分がある人であった。その【人がやってきた】おかげで何年も経たないうちに老嫗の家は金持ちになった。食糧や衣類が増えたばかりでなく、住まいは大きなお屋敷になり、広い肥えた田畑をもち、牛馬も増えた。他方、張家はというと、福運の人（福星）が出ていったため、日一日と家が傾き、馬・驢馬、大きな屋敷や広い田畑がみな他人の手に渡ってしまった。（袁世碩・嚴蓉仙編『馮元君創作訳文集』、一九八三、山東人民出版社。原載は北京大学国学門『月刊』第一卷第四期、一九二六）

以上の2話はいわゆる再婚型だが、同じことは初婚型にも見られる。その1例として浙江省新市伝流の「各人各福」故事を紹介する。

（梗概）ある役人に娘が3人おり、上の2人はすでに嫁^{かたづ}いていた。役人は自分の誕生日祝いの最中、上機嫌で「誰のおかげで気楽に暮らして来られたか」と訊ねた。上の娘2人は両親のおかげと応えたが、強情者の末娘は「人それぞれの運のおかげ」と言った。丁度その時、瘡だらけの乞食が表を通りかかった。腹の虫のおさまらない役人は、末娘に「人それぞれの運を試しにあの乞食について行け」と命じた。彼女は乞食のあとに従い、母親と一緒に暮らしているぼろ船に着いた。（中略）末娘はもともと「富財の星（財福星）」【の現^{うつ}し人】であった。彼女はぼろ船の底から烏金を見つけ、それを元手に陸にあがって米屋を開くと大いに繁盛した。実家の方は末娘が出ていくと衰微し、父親も左遷の憂目に遇い、やがて米を1升買いをするような貧乏暮らしに堕した。（筆録者、何公超。林蘭編『独脚孩子』一九三二、上海。北新書局。東方文化書局複刊本。一九七一、101～105頁）

富財の移動はもちろん搬運神的な婦人の呼び掛けに応じた結果であった。河北省沙河県の「碗の中の金の簪（碗底的金釵）」故事もその1例である。

（梗概）張大剛が妓女海棠に惑わされ、連れ添って何年も経たない郭丁香に老い耄れ牛一頭を授けて離婚した。丁香は老牛の曳くおんぼろ車に乗りながら張家をあとにする時、屋敷のそろそろの物に向かって「福のある物はみな私について来い。福の無い物は張のところ【とどまれ】と唱えた。（中略）老牛の停まった萱葺き小屋に一夜の宿を頼むと、媼は食う物も寝る布団もないと、貧乏を理由に仲々うんと言わなかった。そこに刈った草を背負った倅の范三郎が戻って来て、両人は語らい、刈った草を新婚の寝床にした。福の神（活財星）の丁香が去ると、張家は失火で全財産が丸焼け、他方、范三郎は丁香を妻に迎えてから富み栄えた。（林蘭編『民間趣事新集下』、一九三一、北新書局、97～106頁）

似たり寄ったりの故事が多いので少しばかり毛色の変った話を添える。漢族の民間故事には天界の仙女が俗界におりて来て活躍する話が多い。つぎの「竈王に供え物をする由来（供_王的来歴）」はその仙女下凡の仙話色をおびた故事である。

富豪の張大郎は2人の夫人を妻にもっていた。郭艶双は顔は醜いが氣立てのよい女で、実は「天界の星」の現し身であった。もう1人の妻の益満倉は美貌だが根性の曲った怠け者だった。満倉は妻の座を独占しようとして張を唆かして郭夫人を離縁させた。艶双は自分の身の回りの物を取りまとめ、張の屋敷を振り返ってこう唱えた。（以上梗概）

「南の棟を拝んだ。北の棟を拝んだ。母屋と両脇の棟を拝んだ。私の物は私についておいで。そうで無い物は張大郎にとどまれ」

終わって艶双は出かけた。彼女が立ち去ると張家の財産運（財氣）がすべて艶双に随いて立ち去った。張の暮らし向きは日毎に悪くなるばかり。数百畝の肥えた田畑は種子を蒔いてもさっぱり芽を出さず、僅かに残った高粱畑は秋になっても実が入らない。（中略）益満倉は張を見限って姿を消し、張は物乞いになった。（以下略）（口述者、孫勝台。採録者、単紀蘭。袁学駿・李保祥編『耿村民間文化大観』一九九九、北京図書館出版社、194～195頁）

屋上屋を重ねることになり兼ねないが、仙話に触れたついでにもう1話。河北省元氏県の「竈さんに供え物をする由来（供_君的来歴）」故事。

（梗概）狐の精が美女の郭丁香に身をやつし、一旦は落魄の身となった張大郎の女房になり、仙術を弄して一瞬にして大金持ちにした。しかし彼は妓女の色香に迷って丁香を追い出した。丁香は張の屋敷の真ん中に立ち東西南北の棟を拝み「私のお金は（財帛）は私について出て行け、張大郎の許にとどまるでない」と呪った。するとその夜、張の屋敷は原因不明の火災

で全焼。(中略) 以前瓦を焼いた廃窯に老母と暮らす黒牛兒という若者の女房になった丁香は仙術を使ってその廃窯をりっぱなお屋敷に変えた。(採録者、戴巧玲。劉錫誠編『灶王爺的伝説』、一九九五、花山文芸出版社、88～91頁)

致富譚としての炭焼き長者説話には種々の搬運神あるいは搬運の霊物が登場するが、真の搬運神は福運の婦女であったと私は思っている。漢族が伝える仙話化されたこの型の故事中の、天界より降臨した仙女もその女性の特殊な姿に過ぎないであろう。この女神的存在によって去来、移動する福運は具体的には財物、より端的に米・麦などの食糧、そして金銀貨幣によって具現され、さらにそれらは穀霊とされる飛鳥の去来として表現された。

他方、搬運神の移動には霊性の畜獣、具体的には神・人の騎乗する牛馬が活躍し、これらは本来の搬運神の代役を藉されるようになった。それとともに、搬運神によって齎される財物もその移動・将来ではなく、移動先での財物の獲得、就中金銀財宝の発見によって表出されるようになった。前掲の中国雲南省怒江自治州の民間故事「三番目の娘」

(概略) 父親の怒りをかって家を出された末娘が片目の痩せ馬に騎って山奥の木樵の家に嫁づいた。後日、木樵がその馬を曳いて草刈りに出かけると、馬は蹄でしきりに土を掘る。奇妙に思った木樵がその場を掘ってみると金銀貨幣が続出し、木樵一家は長者になった。(『山茶』1980年第3期、75～76頁)

このように第二の搬運神たる馬自らが金銀財宝を齎すという例もあるが、大抵はすでに多くの類話によって示したように、金銀の礫のモチーフがそれにとって替わっている。つまり、押掛けて来た女に頼まれた男が、与えられた金銀を携えて町へ買い物に行く途中に出合った鳥獣に導かれ、具体的にはその貨幣類を礫として鳥や犬に投げ、空しく女のもとに戻ったのが奇縁となって、近隣並ぶ者のない一大富豪になったのである。このようにして第二、第三の搬運の霊物が登場し、その重疊によって成長し形成されたのが現行の炭焼き長者型説話であったのではないかと私は考えている。したがって増殖し発展してきたこの型の説話の核を成したのは、本来の搬運神としての福分ある神妙な女性であったと推測される。その意味でわが国の長野県下水内郡栄村に伝わるつぎの「運定め話」はこの型の元の面影をたまたまとどめているように思われる。

【産神の問答を耳にした】旦那の家は【産神がアワー俵の運があるといった】その嫁がきたのし、どんどん身上がよくなったと。「いい嫁をもらった、いい嫁をもらった」てんで(といって)よろこんでいたども、兄(嫁の亭主)はなんだやら、その嫁をきらったと。そうして、出してしまったと。嫁どんは仕方がねえさけ、外(別の家)へ嫁に行ったと。そうしたら、こった(今度は)その家は福の神がきたやらなんだやら(来たのであろうか)、げえ(大いに)

身上がよくなったと。(『毎日新聞』1977年4月12日付。稲田・小沢編『日本昔話通観 12 山梨・長野』, 1981, 同朋社, 160～161頁による)

顧みれば、先学たちの炯眼はさすがとすべきものがある。柳田國男が早くに宜野湾市の昔話に注目し、雀の鳴き声を了解して幸運への道を進んだ女性の説明に、儒祖の女婿の公冶長を引き合いにしたことは既に言った。その比較が最も適切かどうかは別にして、炭焼き長者を世に顕わした女性に靈性を認めたのは正鵠をはずしてはいなかった。柳田はさらに炭焼き長者説話の発生を豊前の宇佐信仰に求め、八幡の大神の比義なる「最初の巫女」を、金銀の尊さを教え諭して炭焼き男を天下の分限者に顕わした炭焼き長者譚の押掛け女房と重ね合わせてみたのは、名作『妹の力』の著者にしてなし得た着眼であったというべきであろう。(拙稿「炭焼き長者の話 柳田國男と松本信廣」三田史学会『史学』第75巻第2・3合併号, 二〇〇七) 炯眼は松本信廣氏についても同然である。率直に言えば女権という用語の適否が問題になろうが、同氏は炭焼き長者譚の本質を女権社会と関連づけて考察しようとした。東アジア、東南アジアの各地同様、中国にも西王母信仰をはじめ古くから女神信仰が盛んであり、たとえば西南中国の侗族の薩麻(大祖母)神信仰など今に母神信仰が絶えない。また雲南西北部の永寧地区のナシ族には、現在も母系制社会が遺存している。炭焼き長者型説話に登場する搬運女神が果してどのような女神信仰や社会とつながりがあったのか、それとも無かったのかは、現在手にし得る民間説話からは知る術がない。しかしこの型の説話を蒐め整理分析する限り、目下のところ、その発生が女神信仰につながるのあった可能性は否めない。

ただし炭焼き長者譚にはこれとは別に解かなければならない課題がある。それは搬運神である女神の加護恩寵によって金銀財物を賜わる者は確かに炭焼きが多く、それゆえにこの説話の題名に「炭焼き」が採りあげられる所以であろうが、不可解なことは、金属製錬に最高の重職であり、不可欠な存在であったたたら師類の名が、わが国の炭焼き長者譚にも東アジア各地のそれらにも全く認められないことである。解くべきつぎの課題はこの謎である。

(この項 完)

<引用文献>

伊藤清司 「日本和西南中国的神判」中国西南民族研究会・国立民族学博物館編『西南中国諸民族文化的研究』1990

「炭焼き長者の話 柳田國男と松本信廣」三田史学会『史学』第75巻2・3合併号, 2007

「東アジア各地の炭焼き長者の諸相」(未刊)

川野明正 「東アジアの運搬靈信仰ー日朝中の靈物信仰にみる特定家庭盛衰の伝承・ザシキワラシ・トッケビ・山魃・五通神・小神子・その他」北海道大学『饗餐』第12号, 2002

松本信廣 「日本神話研究の進み」松本編『日本民族文化の起源 1 神話・伝説』1978, 講談社
「大陸と日本」松本編『上掲書』

百田弥栄子「龍脈をたどる馬－西南中国の山曼荼羅」説話・伝承学会編『説話－異界としての山』1977, 翰林書房

柳田國男 「海南小記」『柳田國男全集』第三卷, 2000, 筑摩書房

*資料出典を除き, 引用論文のみをあげた。

新刊紹介

藍翔・冯懿有 著 『中国・老360行』

サブタイトルは「各行各業の歴史縮影 庶民生活的世紀回味」であり, まさしく本書には, 360種におよぶ20世紀初頭の種々さまざまな職業が記されている。

一例をあげれば, 農業 (耕田, 養鴨, 軋棉花, 剥蚕繭など), 手工業 (竹編坊, 印年画, 鋸象牙, 漆匠坊など), 商売 (飯館, 茶館, 美容院, 照相館など), 飲食行 (油条, 冷麵, 羊肉粥, 糖果担など), 小菜行 (売甲魚, 売鶏, 売青菜, 魚販など), 瓜果業 (売甘藷, 糖炒栗子, 糖山楂など), 攤販行 (吹糖人, 売香烟, 売聖書, 売枕頭など), 花鳥行 (売花卉, 売金魚など), 修補行 (修帽子, 釘碗担, 修電灯など), 文化娛樂業 (舞獅子, 拍電影, 軍樂隊, 西洋鏡など), 服務行 (洗衣服, 理髮, 代弁宴席など), 医療行 (江湖郎中, 西医, 接生婆など), 交通行 (老虎車, 沙船, 人力車など), 員工行 (送電報, 女招待, 捕犬員など), 苦力行 (挑水夫, 清道夫, 背枕木など), 巫術行 (化縁, 看香頭, 測字算命など), 乞食・烟賭娼行 (乞討, 舞女, 誘賭など) の職業が記されている。なかに

は, こんな商売もあったのかとちょっと吃驚するような職業まであり, 攤販行, 修補行, 乞食・烟賭娼行などの部類の職業は, 近代の都市民俗の資料としても大変参考になる。

本書はひとつの職業につき1頁を費やし, これら360の職業を解説している。またそれぞれの解説には, それぞれ挿絵が載っている。これらの挿絵は“烟画”と呼ばれるものである。20世紀初頭の上海では煙草業界の競争が激しく, 競争の手段として1枚の絵をサービスとして付けることが行われた。これが上海では“香烟牌子”, 天津では“毛片”と呼ばれたもので, 現在では総称して“烟画”と呼ばれている。この“烟画”の中に, “三百六十行”の図柄のシリーズがあり, 本書はその360枚の絵を挿絵としたものである。1枚の“烟画”の伝える情報のなんと多いことか, いやそれよりも“烟画”の持つ魅力に引き入れられてしまう書である。

(古谷野洋子)

2006年 百花文芸出版社発行 384頁